

日本の教育とキリスト教(1)

関 屋 光 彦

「日本の教育とキリスト教」という問題を考えるに先立ち、なされている筈のことは「現代日本の精神状況如何」の考察である。これについての見解が、問題の考察又は討究を左右することは明白である。しかしひとたびこの考察に立入り分析並びにその結果を叙述しようとするれば、テーマ自体が広汎且包括的なるが故に略述するのも手間の^{かか}要ることであり、速かに主題の論究に進むことが出来ない。そこで斯様な精神状況の概観的考察を内に含ませ、そこから導出される諸帰結を足がかりとして次の如きもう一つのテーマが設定され得るであろう。「現代日本の精神的課題は何か」。このテーマを主題に先行せしめ、その内の若干の点を指摘し、夫々についての考察を略叙し、か様な問題意識——と言うよりはむしろ課題の意識のもとに、主題の考察、討究に移りたく思う。(「教育とキリスト教」について論じようとするとき、殊に日本に於けるこの問題を論ずるに際しては、か様なプロセスを経ることが、私には必要且不可欠なことと考えられるのである。)

ところでこの第二のテーマとて、最初のもの同様、極めて広い視界に立つことを必要とし、網羅的にそこに考え得られる一々を俎上にのぼせ、均衡の取れた配分に於て全般的に論じようなどということは、この小篇に於ては到底なし了せ得る^{わざ}業ではない。なおまた、か様な「課題」を論ずる各人は、夫々相異なる地点、観点に立ち、それぞれに固有な諸制約の下に在るから、このテーマの下に各人が考察し、論結し、或いは著しきものとして指摘し主張するであろう諸点の多様性は不可避であり、むしろ必然とも言えるであろう。

私は私なりに、現代日本の精神状況を脳裏に置き、課題として日本人が

解決を迫られ、求められている、或いは為し遂げて行かねばならないと考えられる諸項目の中で、殊に主題と関連する所も多く且重要不可欠と思われる二、三を新たに節を起して論じて見たいのである。

現代日本の精神的課題

第一、平和愛好の国民 *peace loving people* たること。

敗戦より現今に至る迄、日本に於て、つゆ衰えぬ度合に於て、そして異常なる熱意を以て、世上喧伝されて来た言葉として、「平和」に如くものはないであろう。しかし日本人は、果して真に平和を希求しているのだろうか。真に平和を希求する、とは先ず自らが平和的な人間となることを志向し、この方向に向って万全の努力を払っていることを意味する。私は上に「平和愛好の…」という言葉を用いた。之は、現在の憲法前文にも示されてある、一般的な表現方法に従ったまでであって、日本現代の精神的課題の第一として私の提起したく思うのは、口先や、文字の上で「平和」を言い囃すことではなく、真に平和人的な人間たること、更には平和を作る国民 *peace making people or nation* たること、である。

平和を愛好する、況んや平和を作る人であることは、容易な業ではない。さればこそ聖書にも、山上の説教第七項に、「平和を作る人は幸だ、神の子にさせていただくのはその人たちだから。」(マタイ伝第五章九節、塚本虎二口語訳に依る)と述べられたのだと思う。とも角個人として、また家庭生活に於て、はたまた社会或いは民族、国民の生活において、平和人として生き平和的な人間関係が保たれることは、人間性に根ざす、人間そのものの課題である。「平和人として生きる」と言っても、なお抽象性を免れ得ないとするならば、より具体的に言えば、真の平和人とは、上にも明らかなる如く、平和を作る人、換言すれば「人の心と心とを繋ぎ得る人」を指す。*reconciliation* (和解) を齎らし得る人、かかる人こそ、平和を

作る人、真の平和愛好者の名に相応しい。

かかる観点から考える時、日本社会の実相の、何と平和の実存からかけ離れたものであるかを痛感せしめられずにはおかない。社会生活が、殊に首都（東京）の如き大都会に在っては、近代的市民社会の機構の^{もと}下に営まれ、瞬時もゆるがせにならぬテンポのはやい生活の連続であるが、にも拘わらず、或いはそれなるが故に益々平和的 peaceful な生き方が生活の基調として欠くべからざるものと思惟されるが、現実には夜を日についてこれと逆の道を進んでいるかの如くである。極めて卑近な、一寸した一例にすぎないが、電車の中で、ちょっと人に足を踏まれても、目に^{かど}角が立ち、今にもけわしそうな言葉が飛出さんばかりである。「文化人のエチケット」、とでもいうものが、一応感情を抑制し、^{ふんがいの}念を外に表わさないだけである。内心すこぶるおだやかではない。すなわち「心^{たい}平らかならず」、^{平和}ではない、のである。かくの如く社会、公共の生活に於て、表面何ともないかの如くでも、ことに複雑な人間関係に進むにつれ、^真に平和乃至は友好の関係が実存せず、かえって何かにつけて小大の感情の^い喰違ひ、敵意さえもが、一触即発の危機に置かれている、というのが、「近代的」を自称する現代日本の市民社会の生活の実情ではあるまいか。

「原水爆禁止」ということも、それ自体けっこうな事であるのは言う迄もない。或いは又「日中友好」ということも大賛成である。しかし「日中友好」であるなら、それに劣らず「日米友好」であってよいわけである。善隣友好は万邦にかかわるものでなくてはならない。そして「平和」を唱える以上は、万邦と協和する、との根本精神に立たねばいけない。すなわち「平和」、或いは「友好」の提唱という事を一步掘り下げて考えてみる時、そこには之を提唱し、そのために奔走する基体として「人間」、の問題が横わっている。^{もろもろ} 諸の主義 (causes)、或いは理念 (Idee) を執って立つ場合、之を^{にな}担うものとしての「人間」の問題を忘却し、又は之を切離してしまつては、美しい理念も言葉も空語と化する。それは^{あたか}恰も、機関車の切離された、列車の如きものである。何々列車というものを考える場合

に、私は機関車をくるめて考える考え方に立つ。従って「平和」ということを人間が口にする以上、そして又その「平和」が人間にかかわるものである以上、人間そのもの、を引きくるめて考えようとする、之が私の考え方である。すなわち「平和」の提唱は、本来的 (eigentlich) には、「平和的人間」によってなされるべきである、というのが私の主張したい点である。従って「平和」への希求は、「平和的な人間」たる事を志向し、之に対し不撓の努力が費されることに依り先立たれなければならない、というのが私の考えである。

然るに「平和的な人間」という概念は、勝義に於て「平和を作る人」**peace maker** であり、——さきにも触れた様に——その現実化は容易ならざる人間の課題である。しかし日本は敗戦に依り、この困難なる人間の課題への自覚へと目醒まされた。それ故個々人として、そして又国民的にこの課題達成の為、不断の努力を惜んではならない、というのが私の年来の思索と、貧しい体験からの帰結であり、そして本節の最初に掲げた、平和愛好の民 **peace loving people** たること、という命題が、「現代日本の精神的課題」という問い掛けに対する第一の答えとして、提起されるのである。

附言。国際間の協調、友好或いは平和的關係の増進にせよ、社会、公共生活に於ける精神共同体的 (**gemeinschaftlich**) な意識の重要性必要性の指摘にせよ、又上には未だ立入り得なかったが、家庭生活に於いて必要な和諧、安らぎ、和かさにせよ、将又個々人としての諸の隣人との間の人間關係に於ても、そして最後に孤独なる個人生活に於ける静安、自足、満足と言った点に関しても、私の考える「平和的人間 (平和を作る人)」という概念は、實質に於て悉くかかわりを有つ。否、人間生活の上述の如き多面的な諸様態において、そこに喜悅 (**Freude**) と友好的 (**freundlich, friendly**) な人間關係をもたらし、孤独の場合においても、それはそのままの、閉された孤独の生活に陥ることなく、(一体人間生活に於て、客觀的に見て絶対の孤独の生活など有りよう筈がない)、かえって遂には周囲

を潤^{うる}おし、富ませ、喜悦をもたらずに至る。何となれば——上述迄では掘り下げて述べなかったが——真個の平和的人間とは、魂の平安に生きる人、或いは心の奥底にやすらぎを有する人であり、人間生活の諸関係は、本来的には「魂と魂、或いは心と心との相呼応」を抜きにして考える事が出来ないというのが、私の現今までに摸索し、探^{さぐ}り当った断面なのであるから。

(つづく)

(本学教授)

On Education and Christianity in Japan (1)

(English Résumé)

Mitsuhiko Sekiya

Prior to discussing the above-mentioned problem, the following things should be done: First, a general study to grasp (or to gain an insight into) the moral situation (or the situation of thoughts) in contemporary Japan. But this may not be enough. This first step will lead to the second which should also be dealt with, that is, to scrutinize "what should be the spiritual task in Japan today."

A few points that are considered to be indispensable under the present situation will be pointed out in this thesis. I intend to develop these points in the arguments concerning "Education and Christianity" or "Christian Basis of Education." in Japan.

As the first point, I should like to maintain my opinions that the Japanese people should stand on the solid basis of peace-loving principle and make a strenuous endeavor to become a peace making people.

Other important points will be dealt with in my next article.